

限りない観光ミャンマーの可能性

—歴史・仏教・自然遺産の宝庫とやさしい人々の国—

Myanmar Tourism, Great Potential for the Future

小林 天心*

KOBAYASHI, Tenshin

はじめに

ミャンマーにおけるツーリズムは、まだ始まったばかりである。この国の軍事政権による民衆の抑圧が国際的にメディアによって報じられ、ともすれば観光などとは無縁なネガティブ情報のみが報じられてきたし、現状もそうした事態が続いている。たいへん危険で、何が起こるかわからないというような不安がつねにつきまとう国、といったあたりが今の世界がミャンマーに対して持っているイメージであろう。

私は2009年11月に、日本アセアンセンターのミャンマー観光開発支援プロジェクトアドバイザーとして、初めてこの国を見て回る機会を得た。その2ヵ月後、こんどは個人的にミャンマーを再訪した。40年以上国際ツーリズムの仕事に携わってきたが、ここまでインパクトの強い印象を与えてくれた国はそう多くない。ミャンマーの現実は、われわれの想像をあらゆる面ではるかに上回って

いる。紀元前というより何千年も昔からの、インド・中国方面との交流や文化的影響、仏教の浸透、たくさんの部族や民族および言語、自然環境、気候、さらにはおよそGDPなどといった数字とは無関係な人々の暮らし、食べもの、風俗。この国に光り輝いているのは、けっして巨大なパゴダばかりではない。ひとつのデスティネーションとしてこの国を見ると、まったく驚くべき多彩な、端倪すべからざる魅力に満ちている。

しかしこのインドシナ最大の国ミャンマーの実態は、軍事政権に対する欧米の経済制裁あるいは情報制裁により、世界中にほとんど知られてこなかった。日本に出回っている旅行ガイドブックも、正確にこの国の魅力を伝えているとは、とても言いにくい。先のアドバイザーとしての役割は、この国が持つツーリズム価値、観光的魅力を把握し、日本の旅行市場にミャンマーを「ミャンマーにとって望ましい形で」、売り込む道筋をつけることにある。

私が足を運んだのは、ようやくオープンになってきたこの国の一般的な観光ルートにすぎない。

* 本学経営学部教授

ベンガル湾方面や、北のヒマラヤ山脈方面は未見である。このレポートではミャンマーの歴史をまず概観した後、ビルマの人々、仏教、軍事政権、各地における観光の現状などにつき一通り触れる。そして今後の日本からのビルマ観光旅行企画につき、とりあえず一般的な取り組みに関する提案を行いたい。

2010年11月には、この国20年ぶりという総選挙が行われることになった。しかし軍事政権は民主化勢力や政権に対抗する少数民族系を選挙から締め出しており、「民主化」とはほど遠い政治状況下にあることをマスコミが報じている。国際的なツーリズムの進展が、こうしたミャンマーの現状に多少なりとも好ましい影響をあたえ、広く経済効果を及ぼしつつ、この国との交流と理解に役立つ事を願わずにはいられない。



1. ミャンマーのあらまし

ミャンマーはインドシナの北西に位置し、西側はインド、バングラデシュ、ベンガル湾に接している。北東部は中国とラオス、東側はタイと接した、南北に2000キロも伸びているインドシナ一番の大国である。面積は日本の約1.8倍、人口は6000万人。1989年、軍事政権は正式国名をビルマからミャンマーに変えた。政治的な文脈抜きにすれば、ニホンとニッポンに似て、どちらも同じように使われてきた名称である。

気候は北部が温帯、中部と南部が熱帯に属しているが、バガンあたりの中部は年間雨量600ミリ、南部に比べ極端に少ない乾燥地帯である。南部は高温多湿、ヤンゴンの年間雨量は2500ミリに達し、シットウェーあたりは5100ミリにもなる。雨量に関しては中央部バガンを中心に外側に向かうほど多め。ミッチーナーなど北部は1900～2500ミリ。南部方面はさらに多雨だが、山間部や海沿いでは相当な差がある。

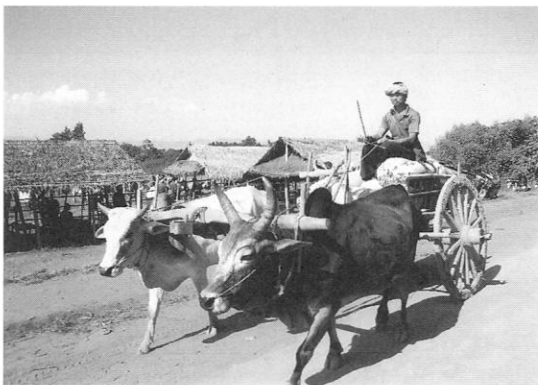
よく知られているように、1988年から続いているミャンマーの軍事政権は、その非民主的な人権抑圧を国際社会から非難され、欧米や国連などの経済制裁を受けてきた。しかし、中国からの支援、天然ガスの輸出、1999年のASEAN加盟などもあり、国内事情はすこし落ち着いているかのように見られている。年間産出量30億ドルといわれる天然ガスの輸出が、政権にとって重要な収入源になっている。この国の一般的な労働月収が20ドルほどでしかない現状からすると、この30億ドルは天文学的な数字である。

軍による独裁権力の民主化移行は非常に難しい。権力を手放したが最後、自分たちの命に保証がないからだ。なぜなら彼ら自身に、反権力側を冷酷に抑圧、ときに抹殺してきたという自覚がある。

立場が逆転すれば、こんどは自分たちがそのように扱われる可能性が高い、と考える方が普通であろう。したがって通常、独裁権力は死ぬまでその権力を他に譲ろうとはしない。

ガイドブックなどにはこの国を旅行する際の注意事項などが過大に書かれている。しかし実際には、旅行者にとってむしろ安全な国と言っていいかもしれない。空港の入管から始まり、軍や警察の姿を目にすることもなし、写真撮影も自由になった。カメラを向けるなどされるのは軍の駐屯地ぐらいである。国民のほとんどが敬虔な仏教徒であり、やさしい。そして何よりこの国全土が、とほうもない仏教文化の遺産で埋められている。

国の北部はヒマラヤ山脈に食い込み、頂点にカカボラジ山(5881m)がある。もはやブータンまでは指呼の間といていい。そのふもと近くから流れ出すミカ川がミッチーナの30km上流でマリカ川と合流し、エーヤワディー(イラワジ)川と名を変える。この大河はそのままバモー、マンダレー、バガン、ピイ、パテインなどをつないでミャンマーを縦断、アンダマン海に注ぐ。「母なるエーヤワディー川」は、この国の大動脈であり、幹線道路である。田畑を潤し、人々に水と食糧を与え、しかも四国の1.5倍もの面積に相当する肥沃なデルタを形成し、この国をアジアの食糧倉庫のひとつにしてきた。



農村部では牛車が主な運輸の現役として活躍している(ヘーホー付近)

ミャンマーの国際観光年

ミャンマー政府は1996年を国際観光年に指定して以来、諸外国にその観光的魅力をアピール、ホテルなどのインフラ整備も進めてきた。しかし今世紀に入って以降の世界的事件や、2007年に起きたヤンゴンの騒乱などの悪影響もあり、国際観光の伸びははかばかしくない。2009年の入国者統計を見てみると、アメリカ1万4000人、フランス1万人、ドイツ9000人、イギリスとイタリアから各6000人、中国2万4000人、日本1万4000人、台湾・韓国各1万2000人、そしてお隣のタイからが4万3000人など、09年現在、全部で23万人弱の外客しか受け入れていない。

ミャンマーは多民族国家である。しかし国民の7割はビルマ族で占められ、国の中央部7つの管区中心に住んでいる。これを両側から挟むように、以下数%ずつの少数民族の人々が住む州がある。西側にはヤカイン州とチン州、東側に北からカチン州、シャン州、カヤー州、カイン州、モン州。ミャンマーは第2次世界大戦後の1948年、イギリスから独立を勝ち得たものの、少数民族の多くが独立をもくろんでいた。ビルマ独立運動の英雄アウンサン将軍は少数民族に自治権を与え、連邦政府という枠組みを志向したが、独立を見る前に暗殺されてしまう。現在ミャンマー民主化運動の期待の星、アウンサンスーチーさんは彼の娘である。1950年代のミャンマーでは、諸民族間、共産党、社会党、軍などのあいだで抗争が続いた。やがて1962年にネーウインが、軍事クーデターにより「ビルマ式社会主義」(ビルマの伝統と文化に合った社会主義)の独裁政権を確立する。そして四半世紀たった1988年、アウンサンスーチーをかついだ民主化運動が起きた。しかし、再度の軍事クーデターにより弾圧され、現在もなお軍事政権が続いているのは周知の通りである。目下各州と軍事政権の間における軍事的な対立は沈静化しつつあるように見えるが、いつ再燃してもおかしくない

状況は残されている。

ミャンマーそれぞれの管区・州内には、さらに細かく135に及ぶ少数民族の人たちが住んでおり、異なる言葉や習慣など、それぞれが文化的な多様性を誇っている。かつては上記のような政治的理由により、観光客も足をいれることができなかった州にも、最近では外国からの観光客が訪れるようになってきた。

農業が主体の産業構造

ミャンマーの産業は圧倒的に農業が主体である。豊かな田園風景がどこまでも広がっている。GDPに表されるような経済指標からすると“貧しい国”とされてしまうが、そのような数値に表れない豊かさがある。ほとんど自給自足に近い農村部のゆったりとした暮らしぶりや、人々の明るい笑顔をみていると、実質的な豊かさを感じることができる。

この国にはまだ電気がゆきわたっていない。都市部も含め1日数時間の時限給電である。法人やホテルなど、あるいは裕福な家庭は自家発電で補っている。現地の人々の説明によれば、ビルマ族中心の管区においておよそ6割、少数民族が主体の州においてはまだ3割ほどの世帯にしか給電されていない。しかも地方の家庭では、配電が行われてもお金がかかるからと、電灯をつけたりしない家もまだまだ多いらしい。

第2次世界大戦のあと独立したミャンマーは、混乱の中にありながらも、東南アジアやインドシナの先進国だった。かつて国連の事務総長を勤めたウ・タント氏はビルマの出身である。しかしその後の社会主義時代における経済の低迷、政治の混乱が長く続き、この国のきらびやかな仏教文化、豊かな自然や歴史、多彩な民俗の魅力などは、時代の流れの陰にとどめおかれてきたかの感がある。とくにミャンマー式社会主義の時代は、半鎖国的とも言えるほど対外的な交流を絶っていた。およ

そ半世紀の時代を経て、それらはようやく国際観光市場にクローズアップされつつあるようだ。

09年現在ではミャンマーへの国際送金もままならない。クレジットカードが通用しないところが多く、一流ホテルも例外ではない。したがってミャンマーの企業は銀行口座をタイのバンコクなどに開設し、そこからキャッシュを自国に運びこむなどの手段を講じている。旅行者もまたキャッシュを持参し、入国後現地のオペレーターに支払ったり、換金依頼するのが普通である。公定レートと実質レートの差が20倍近くあることにも注意が必要、公定では100円が5チャットほどでしかないが、実質は1000チャットほどになる。

ベンガル湾に面したヤカイン州にはガパリ、ウエサン、チャウンターといった第一級のビーチリゾートも出来上がっている。とくにガパリなんかはブーケットよりきれいだと、ミャンマーの観光関係者は語っている。



ミャンマー最大の都市ヤンゴン
半世紀以上たつ古い建物が多い

2. ミャンマーのデータ

国名：ミャンマー連邦 (Union of Myanmar)
首都：ネピドー (06年に新しい首都が、ミャンマー中央部につくられた)

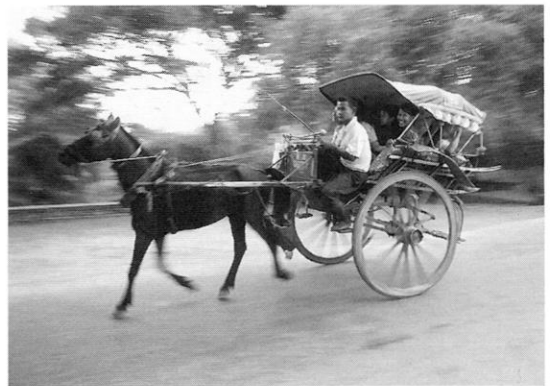
国土面積：68万平方キロメートル
 人口：5322万人（04年発表、ただし09年現在
 ざっと6000万人とされる）
 公用語：ミャンマー語
 主な産業：農業
 主な宗教：仏教（上座部=小乗仏教）
 GDP：156億ドル、国民一人当たりのGDP
 は219ドル（07年、IMF 推計）
 通貨：チャット（09年現在、1ドル＝
 1000～1100チャットが目安）
 およその見当としては100円が1000チャ
 ットである
 旅券：残存有効期間6ヶ月が必要
 査証：必要（3000円）
 ヤンゴン到着時にアライバルビザを空
 港で取得できるが面倒
 予防接種：不要
 電圧：220～240ボルト、50ヘルツ
 水：水道の水は飲めない。ホテルなどでは
 ペットボトルが用意される

3. 「パガン王朝」からのビルマの歴史

現在のミャンマーのあたりに最初に定着したのは、モン、クメール、パラウンなど、オーストロ・アジア語系の人々とされている。その次がシナ・チベット語系民族であるカチン、チン、ピュー、アラカンなど。次がシャン、ラオ、カレンといったタイ・シナ語系。そして今日最大のビルマ系民族が南下してきたのはずっと後、8世紀あたりのことらしい。しかし10世紀以前のミャンマーに関しては、文献や確実な資料が乏しく、正確な事はわからないようだ。中国の文献に1～9世紀のピュー族の国家が登場する。しかし雲南に興った南詔の侵入をうけたりして、ピューは9世紀前半に滅亡したものとみられている。

同じころゴビ・チベット方面からビルマ族が南下し、マンダレーの南にあるチャウセーあたりに定着した。先住民のモン族から灌漑技術をとりいれ、稲作も行った。彼らは9世紀中ごろにはパガンに進出、国家を形成する。そして11世紀中ごろ、アノーヤター王（在位1044～1077）が第1次のビルマ統一王朝を建てた。彼はモン族を攻め、上座部仏教をもたらし、以後250年に及ぶパガンの王朝の基礎を築いた。やがて蒙の文化はビルマの文化へ溶け込んでいった。上座部仏教が民衆の間にも浸透し、歴代の王や有力者はこぞって仏塔や寺院を建て、土地・奴隷なども寄進した。

13世紀になってパガンは4度の元の侵攻を蒙る。王は南ビルマに逃げ1287年にパガン王朝は終わった。このあとはシャン族の覇権時代が続き、首都はピンヤ、ザガイン、インワなどを回るが、ビルマの文化は継承された。1457年にセイロンへ仏教使節団が送られ、そのあとバゴーが一大仏教センターになった。



住民たちの足になっている馬車（パガン）

ビルマ族の第2次王朝はバインナウン王（在位1555～1581）が確立したタウングー王朝である。彼は当時アジアに進出してきたポルトガルの傭兵を使い、周囲に対し優位に立ったとされている。1626年にオランダ、1647年にイギリス、1689年にはフランスがビルマに商館を開いた。しかし18世紀になると清の侵攻や、フランスが推した蒙の独

立宣言などもあり、第2次のビルマ・タウンゲー王朝は1752年に終わる。背後にはイギリスとフランスの勢力争いがからんでいた。西欧の帝国主義にアジアが翻弄される時代に入ってゆく。

第3次のビルマ王朝はアラウンバヤー（在位1753～1760）が興したコンバウン王朝である。1754年にインワを奪回、モンを駆逐し、ダゴンを占領してヤンゴンと命名した。ビルマ語で「終戦」を意味する。3代目のシンビューシン王は隣国アユタヤを攻め、10万人の捕虜をビルマに労働力として拉致した。第6代のバドン王（在位1782～1819）により、ビルマの版図は現在の連邦に近いところまで拡大した。しかしこの拡大政策は、当時インドを植民地としていたイギリスと衝突する。1824年に第1次、1852年の第2次、1885年の第3次緬・英戦争が戦われたものの、結局イギリスの思惑通りにコトは進められ、1886年にビルマは英領インドに併合されてしまう。この間、イギリスはすでに首都機能をヤンゴンに定め、ここにさまざまな投資を始めている。ビルマ側は、第10代のミンドン王がフランスに接近を試みたり、1858年には首都をマンダレーに移して王宮を築いたりしたが、結局は第3次戦にイギリス軍の手で11代目のティーボー王が捕らえられ、コンバウン王朝は終わった。イギリスはビルマを英領インドに合併する。そしてこのあと第2次世界大戦をはさみ、1948年にビルマが独立を果たすまでイギリスの支配は1世紀近く続いた。

第2次世界大戦中1942年に日本軍がビルマに進駐、3年半にわたってビルマを占領した。英国の勢力をインドに追い返し、ビルマを独立に導いたという歴史解釈が日本にはあるようだが、他のアジア諸国におけるそれと同様、かなり身勝手な思い込みが混っているようだ。

4. 複雑な民族構成と「お上」意識

長い歴史をとおしてミャンマーは多民族国家だった。中央部イラワジ（エーヤワディー）平原を押さえてきたビルマ族に対し、東部のシャン、西部のチンヤナーガ、南部のカイン（カレン）やモン、北部のカチンなど、きわめて複雑なモザイク模様を呈していたと、大野徹は『謎の仏教王国パガン』（NHK ブックス）に書いている。同書からもうすこし引用する。

「王朝時代には、人口が多く、武力に勝るビルマ族によって、他の少数民族が支配されるという形態が確立されていた。（中略）ビルマ族は、少数民族がその支配を甘受し、属領としての立場を承服している限り、無用な手出しをしなかった。（中略）ビルマ族と山地少数諸民族との紐帯は比較的穏やかだった。そうした穏やかな関係、言い換えると互いに干渉を避けた比較的疎遠な関係が、少数諸民族の民族的自立性を保ってきたのであった。しかしながら、第2次世界大戦が終了し、ビルマが連邦制国家として独立すると、図らずも民族間の利害関係が露呈されることになった。



朝日がのぼる時間に熱気球でバガンの遺跡群を空から観光することもできる

カレン、シャン、カチン、アラカン、モンといった代表的な民族以外に、チン、パラウン、カヤーといったきわめて人口の少ない民族からも、ビルマからの分離独立要求が出され、それに赤旗と白旗の2派に分裂したビルマ共産党が加わって、あわや連邦制国家崩壊の一步手前という危険な状態にまで至った。独立後のビルマに、1962年と1988年、2度にわたって軍政権が登場したのも、そうした複雑な民族構成の上に成り立つ連邦制国家の脆弱性に起因するといつてさしつかえない。」

「アノーヤター王によるパガン王国建国から今日まで1000年ちかい歳月が経過した。この間ビルマでは、60年に及ぶ英領植民地時代を除き、パガン、ピンヤ、ザガイン、インワ、タウンゲー、ニャウンヤン、コンバウンと、一貫して絶対性君主国家が続いてきた。(中略) 国王は生殺与奪の全権を所有していた。」

ビルマ語で一人称代名詞を「チュン・ドー」という。チュンは奴隷、ドーは高貴な人への敬意を表す接尾語である。21世紀の今も使われているチュン・ドー＝「私」が、語源的には奴隷、つまり「陛下の忠実な僕」から派生しており、この言葉にしみじみも、パガン時代以来一千年の歴史が凝縮している、というのが大野の説明だ。

「英領植民地時代には、王朝時代のこの王対奴隷という概念が、植民地政府対住民という形に置き換わった。政府はビルマ人住民にとって磐石の重みを持つ『お上』である事実には変わりはなかった。そこでは、反抗も抵抗も許されなかった。(中略) 政府への反抗は、王朝時代における国王への反逆と全く同じ形で処理されたのである。(中略) 軍政と国民との関係も、形を変えた絶対的支配者と『チュン』との関係に他ならない。西洋社会で芽生えた個人の権利や民主主義という概念は、現在の段階でビルマに根付いてはいない。国家を構成する主体は国民なのだという考えは、

『国家』という言葉のまえでは無力である。」

「州制度は骨抜きにされ、分離独立を求める少数民族の運動は激化した。その結果もたらされたものは、国家予算に占める国防費の異常な高さ、生産活動の停滞、輸出入の不均衡、極端な外貨不足、対外債務の増大、そして世界最貧国という国際社会における屈辱的な立場であった。」

つまりやさしく敬虔な仏教徒がほとんどのミャンマー国民にとって、権力者たちにより行われる政治は雲の上の出来事だった。しかも国民の大半は農村部にあり、依然自給自足に近いつましい暮らしの中にある。ヤンゴンなどの都市部における反政府活動は、アウンサンスーチーさんを見るまでもなく、完全に押さえ込まれたままだ。都会を一步出たところにとめどもなく広がる農村の暮らしにとって、権力の変遷はどう転んだところで大差のない厄災、大昔から続けられる「お上」の綱引きに過ぎないと、仏陀の教えとともに、諦めさせられているかのごとくである。士農工商という厳格な身分制度のうえに、「長いものには巻かれる」と、すべてを諦めてきた江戸時代の日本人との、完全な相似性をここに見る気がする。



水田をたがやす農夫と犁をひく水牛（インレー）

5. ビルマ語とそのカタカナ表記

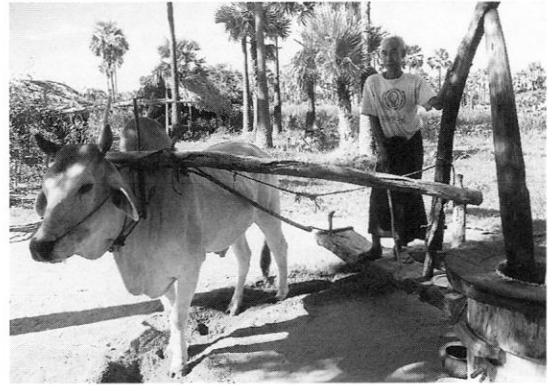
現在のミャンマーに古くから住んでいたピュー、アラカン、モン族などの文化には、西隣りであるインド文化の影響も強い。陸続きであるし、舟による沿岸部の行き来や、通婚も行われてきた。今も人々の顔立ちや文化に、インド風の雰囲気はかなり強く感じられるところがある。紀元前から、インド東海岸やスリランカとビルマ南西部地方は、ベンガル湾沿いに活発な往来が行われていたようだ。いっぽうシナ人の到来はインド人より後、とくに唐の時代以降そうとう盛んになってきたようである。

ビルマ語が文字で書かれるようになったのは11・12世紀頃のことである。モンやピューも当時すでに文字を持っていた。それらはいずれも南インド系の文字であるとされている。古モン文字が少しずつ姿を変えて現在のビルマ語になった。

多民族、多言語であるビルマの固有名詞などをカタカナで表記するのは難しい。話す人によっても発音が多少異なる。撥音、濁音、鼻にかかる音、あるいは日本語の五十音にない微妙な発音などがかさなるためである。地名、人名などのカタカナ表記が、書く人によって異なるのもそのためだし、現時点ではやむをえない。たとえばシャン州でさえ40もの少数民族の言葉が話され、お互いにはまったく通じないことがおおい。あるいは、人によっては5つも6つも、こうした言葉に通じている人もいる。文化の多様性と国としての統一は、とくにアジア諸国の場合、二律背反の様相を呈している。

かつて日本で使われていた表記、あるいは歴史的な文脈におけるビルマ、バガン、ランゲーン、ペゲー、アラカン、イラワジ川などの表記は、ミャンマー、バガン、ヤンゴン、バゴー、ヤカイン、

エーヤワディー川などに変わったり、あるいはそのまま使われたりもしており、一定ではない。



牛がのんびり石臼をひいている (バガン郊外)

6. ミャンマー軍事政権の主張

先にも述べたとおり多民族国家のミャンマーは、国家としての民族統一がもっとも切実な問題となっている。諸外国からの非難も激しい現政権にとって、なにがなんでもこれを完成させなければならない。よけいな雑音から国民を守らなければならない。国内のいろいろな刊行物にも、下記のようなスローガンが掲載されている。他国からの干渉を排除しつつ、ミャンマーの政府がどれほど懸命に、ミャンマーに住む人々を「ひとつの国・国民」にまとめ上げようとしているかが見てとれる。

日本のように海に囲まれ、いちおう統一の国家として400年以上がたとうとしている国から見ると、想像を絶するほどの難しい権力構造、国家運営であるに違いない。軍という存在は、対外的な軍勢力というより圧倒的に対国内用の、政権にとって絶対不可欠な治安維持機能を果たしているようだ。中央に反発している少数民族側の「体制」も、基本的構造は変わらない。規模の大小におけるの違いがあるのみであり、それを陰から支える諸外国の思惑が、事態を難しくまた複雑にしてい

る。下記のスローガンを一瞥するだけでそうした状況がよくわかるであろう。ようやく全国統一を成し遂げた織田信長と、それに対立した諸大名、およびその諸大名の後押しをする諸外国勢力、といったような事態を想定すればわかりやすいかもしれない。

「国としての3つの主張」

1. ミャンマー連邦を分解させない
2. 国としての団結を崩壊させない
3. 国の独立主権を不朽にする

「国民のねがい」

1. 諸外国からの悲観的観測やその手先にのらない
2. 国の安定や進歩を危うくすることに反対する
4. あらゆる内政干渉に対抗しなくてはならない
5. 内外からの非建設的諸要因をつぶそう

「4つの政治目標」

1. 国の安定、コミュニティの平穏平和、法と秩序の確立
2. 国の再統一
3. 新しい憲法の制定
4. 憲法と調和した新しい国家の建設

「4つの経済目標」

1. 農業を基本とする、諸産業の発展
2. 市場経済への正しい進化
3. 内外からの技術や投資促進による経済発展
4. 国と国民自身の手による経済主導

「4つの社会目標」

1. 国民全体のモラル向上
2. 国の威信、高潔さ、文化遺産と国民性の保全
3. ダイナミックな愛国心の向上
4. 健康、体力、教育の向上



砂糖ヤシにのぼる少年（バガン郊外）

7. ミャンマーの仏教

ミャンマーの人口のおよそ9割が仏教徒とされている。そのほかはキリスト教5%、イスラーム4%など。タイ、ラオス、カンボジアなどと同じ上座部（小乗）仏教、一人ひとりが悟りの境地に達することを重んじる。大人の僧は比丘、子供が沙弥。比丘は227の戒律を守らなければならないが、沙弥の守るべきは10戒のみ。出家と在家は行き来が自由だ。在家なら守るべき戒律は、殺さない、盗まない、姦淫しない、嘘をつかない、酒を飲まない、という5つだけである（殺生、偷盗、淫行、妄語、飲酒）。男子は一生に一度は出家して修行するというのが、今も続く社会的なしきたりとなっている。

8. 千年続いてきた歴史のバガン

バガンは11世紀に、ミャンマー最初の首都として勃興した都市である。マンダレーと並び、ミャンマーのほぼ中央に位置する。昔からたくさんの貿易船は、アンダマン海からこのあたりまでエーヤワディー川をさかのぼってやってきた。ヤンゴ

ンからマンダレーまでは960キロ、さらにバモーまでは1400キロも、外洋船がさかのぼることができる。

現在およそ40平方キロというサバンナを思わせる赤土の平野に、2000以上とされる大小の寺院（パゴダ）や仏塔が無造作に建っている。それらのひとつひとつが歴史と文化と信仰の貴重な証しである。土が盛られ、赤い煉瓦が積まれ、あるいは白く塗られて、あるいは金箔をまとい、森の中から聳え立ち、草の中に埋もれそうになっている。バガンに残る仏塔や寺院のうち、大型のものはすべて国王たちの寄進による。時代をこえて権力者や有力な人たちが、仏陀の教えに従い、功德をほどこすため、競ってより大きな寺院を建て、仏塔を寄進しつづけてきた。それゆえ現政権もまた、彼らの新しい首都ネピドーに、史上最大の寺院を建てているのである。いっぽうかつての王宮などは、崩れた土塁にかろうじてその片鱗をとどめているに過ぎない。

「徳を積むことの結果は、来世においてしか知ることができない。現世においては、徳—悪行の差引計算を客観的に証明し得るものはなく、個々人の徳の行為の回数の多さと規模の大きさを手がかりにするだけである。それゆえパゴダや僧院がこのんで建てられ、僧院・僧侶に寄進が続き、仏教儀礼が熱心に数多くもたれる。そして儀礼の場合、より大規模なもの—より多くの参加者、より多くの布施、より多くの徳—が目指される。」（前出、『もっと知りたいミャンマー』）

経済的にはとほうもなくムダな行為である。次から次へと建てられる寺院や仏塔のために、どれほど大きな労力、時間、コストが費やされたであろう。生きている社会にとって、これらは一文のトクにもならない。一種の公共事業という見方をするなら、働く方にとっては多少の収入をもたらしたかもしれないが、社会的生産に寄与するインフラではない。いわば権力者の自己満足のための

浪費である。したがって権力の源泉である民衆の著しい疲弊を招く結果にしかならない。資本の蓄積は行われず、持続的な発展はなく、外敵への備えも不十分という、現世においては権力の基盤を突き崩してゆくばかりだった。しかしながらそのおかげで、今日の我々はそれらを、他には見られない文化の「遺産」として享受させてもらっている。



夕暮れのエーヤワディー河畔で水を汲む少年
(マンダレー)

9. バガン寺院群の観光は早朝と夕暮れ時

金色に輝くシュエジーゴン・パヤー（仏塔）、多くの壁画が残るクービャウチー寺院、バガンで最も美しいとされるアーナンダ寺院、65メートルの高さを誇るタッピンニュー寺院、空間いっぱいに寝仏が横たわるマヌハ寺院、重厚なダマヤンジー寺院、シュエサンドー・パヤーなど、訪問すべきところを指折ってみてもきりが無い。バガンには最低でも2泊、できれば3泊したいところである。日中は暑い。それで昼食をはさみ3～4時間の昼休みをとっておくのが無理のない日程となる。とくに早朝、朝日がバガンの平原にのぼってくるシーンと、おなじく夕日が沈んでゆくシーンは、何度見ても感慨深いものがある。

シュエサンダーは1057年に建てられたという5層のパゴダだが、この最上階からの朝日夕日の眺望はとくに人気が高い。地上50メートル近くはあろう5層目の四角なテラスから、刻々と変わるバガンの幻想的な風景を見る。朝もやの中に浮かび上がってくる無数の寺院の影。あるいは夕日に沈んでゆく四方の光景。赤いレンガの建物が、朝日や夕日の中に少しずつその色を変化させてゆく様子。緑の森影が次第に黒く沈んでゆく、あるいはその逆の移り変わり。それらはまるで地平線の彼方まで続いているように見える。地上にある無数の寺院群を空がおおい、太陽の光が宇宙的なまでに壮大な光景を、息つくひまもなく変化させてゆく流れに言葉もない。

朝日が昇ってくる時間に、このバガン全体を熱気球に乗って眺めるツアーがある。料金はひとり250ドル。けっして安くはないが、この時間帯に、この方法でしか見られない、思い切った観光のしかたであることに間違いはない。

ひとつひとつの寺院やパゴダ自体がとんでもない文化遺産だが、おそらく上記のようなバガン平原全体のかもし出す一種独特な深み。その壮大な雰囲気と光景が、すべての人の心に深く、何かしら宗教的な時間の体験というに似た気持ちを浸みこませてくる。

こうしたバガンの観光には、ゆっくり馬車をしたてて巡るという方法もある。車でどんどん回るより、よりバガンを身近に感じられるからだ。カンボジアのアンコール、インドネシアのポロブドールと並び、バガンは世界3大仏教遺跡のひとつに数えられている。しかしこの平原全体に広がる寺院群は、圧倒的空間スケールの雄大さによって他の二つをはるかに凌いでいる。



ストリートセールスに懸命な少女の笑顔
頬にタナッカーを塗っている (バガン)

10. バガンのストリート・セールス・チルドレン

おそらくミャンマーで一番、積極的にセールスを繰り広げているのは、バガンの子供たちであろう。しかも明るく、くったくがない。マンダレー周辺やバゴーなどでも相当なものだが、バガンの主要な寺院で観光客を待ち受けるかれらに遠慮はない。まず、「おにーさん！」あるいは「おねーさん！」という元気な呼びかけから、かれらの活動が始まる。次に、「カッコいいねー、きれいだねー」などというお世辞のセリフ。そして手に高くかかげて迫るのが、1000チャット、約100円、1ドルの絵葉書である。他にもいくつか品物はあるのだが、とにかくこれを観光客に突きつけて、日本人と見れば「センチャット！」と叫ぶ。

かれらのほとんどはプロだから、観光客の国籍の見分けもすばやい。アメリカ、フランス、スペイン、ドイツ、タイ、韓国、中国、日本。「おにーさん、かっこいいねー！ 安いよ、センチャット！」という一連のセールストークを、上記8ヶ国語くらい、全員がなんなくまくし立てられるのだという。こうしたみやげ物のセールスには胴元がいる。かれらの卸値がバガンなどでは50セント、

子供たちは価格協定を守り、これを1ドル連呼で売る。ところがどこでも代わり映えない品物を突きつけられるから、たいがいの観光客は辟易うんざりしてしまう。もう少しマシな物品はないだろうかと思うのだが、どういうわけかこれがほとんどどこへ行っても同じである。

観光地のお土産セールスには、もっと土地独特の産品を屋台に並べ、さりげなく売るのが無理がない。押し売りという手法では、観光客はそっぽを向くばかりだ。子供たちも生活に必死なのは良くわかるのだが、それだけにもう少しいい商品と、商売の方法が考えられないものかと、残念至極に思われる。

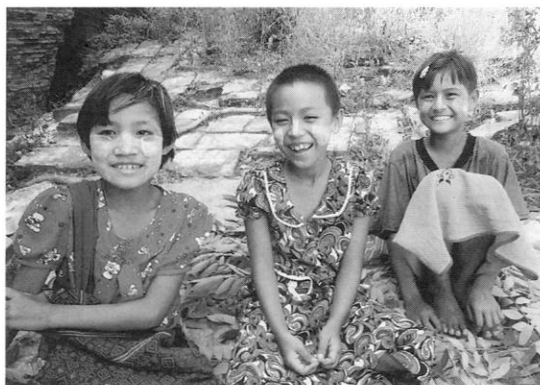
ゴミ問題とあわせた解決策試案

どこへ行っても各地にはプラスチックのゴミが散らばっている。ひとつの思いつきだが、たとえば各地に「クリーンアップ・キャンペーン」のためのNPOなどを立ちあげられないだろうか。観光客あるいは旅行会社は、何らかの形で（入域料とかツアー代金の中に入れて込んで）一定の金額を集めNPOに渡す。NPOはセールスチルドレンたちを組織化し、かれらにセールスなどさせないで、代わりに観光地や町の清掃に動員する。週末だけでもうまくやれば、学校に行くのにも支障はないし、センチャット連呼というほとんど無駄なエネルギーも使わなくてすむ。もちろん心中、彼我の貧富の差にいささか心苦しい思いをしている観光客にとっても、嬉しいシステムになるだろう。ごくわずかなNPOへの寄付により、訪問先ごとに押し寄せるチルドレンの波から解放されるからである。

バガンに観光客が年間20万人やってくるとしよう。かれらがひとり1ドルずつ拠出したとする。これを子供ひとりあたりに、年間100ドルずつ配分する。これは手織物工場で働く女性の賃金が月額20ドル=1日わずか70円前後というミャンマー

の相場からすると、けっこう高額である。たったこれだけで、先の子供たち2000人分のクリーンアップ人件費が捻出できる。もちろんNPO運営経費などが計算されなければならないが、かなり希望の持てそうな机上プランではないか。

いずれにせよ、何らかの具体策がほしい。上記の素案は観光客も、観光地も、子供たちも、それぞれがハッピーになれるような、観光地経営の持続可能性を高めるプランとなる可能性がある。ミャンマーにあるオペレーター組織の「Myanmar Marketing Committee」と、たとえばJATAなどが協力して、なんらかの具体策をつくってもらいたい。成功事例がひとつできれば、他国からの観光客や観光会社もフォローするであろう。



ビルマ独特の化粧法、タナッカーを頬に塗った少女たち（マンダレー）

観光客がスポイルする生活

この問題に関し諸国各地の状況を見てみると、国の経済がある段階に達するにしがたい消えてゆく。日本にしても、第2次世界大戦後アメリカから占領軍がやってきて日本にいた間、しばらくは日本中の子供たちがアメリカ兵に対し、「ギブミー・チョコレート」を連呼していた。ストリートセールスの子供や大人たちもいただろう。傷痍軍人が街角に立つ姿も、かなり後まで見られていた。セールスチルドレンや物乞いたちは、とくに外

国人観光客が多い地域に集中している。一般的な観光地ではない地域には出現していないし、外国人観光客自体がまだあまり多くない地域や国においては、こうした姿を見ることがない。あたりまえに自然で素朴な子供たちの笑顔がどこでも見られる。つまりこうした状況は、「善意の外国人観光客」が自分で作り出してきたのであり、ミャンマーの子供たちに責任はない。

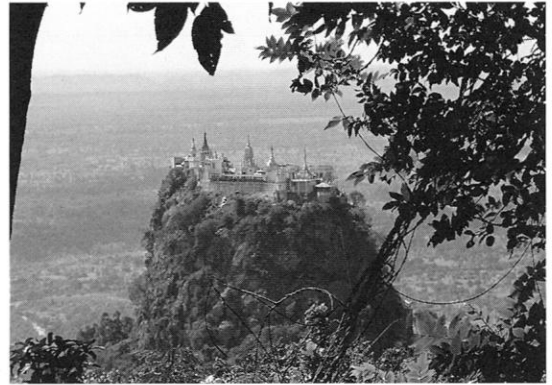
この事態ははなはだ不謹慎なたとえではあるが、「野生動物にエサをあげないでください」というコードを連想させてくれるであろう。つまり人が動物に安易に物を与えたりすることが一般化すると、かれらの通常的生活パターン、自然な状態における捕食意欲や努力を削ぐ結果を招き、スポイルしてしまう。

絶対的な食糧不足に対しどう対処するのかに対しては、ここでは踏み込まない。

旅行する側の満足度からすると、このわずらわしい問題が解決されない限り、結果的に旅行を十分楽しむことができない。また、戦争の後遺による身体障害、病気の子供を抱えた母親、小さな子供が幼児を抱えて物乞いをするケースなどもあり、これらをストリートセールスと同様に考えるわけにはいかない。ストリートセールスをしている立場の人々も、「自分たちは物乞いではない」というプライドをはっきり持っている人がほとんどである。

いずれにせよ、豊かな観光客と貧しい人々をつなげるなんらかの合理的システムが考えられないだろうか。観光客の多くは現実に目をつぶっては通れない気持ちから、「ほどこし」をしてきた。しかしそれがいつその期待と依存を生み出している。限りなく押し寄せるセールスや物乞いに、もはや観光客がその都度反応することなどとてもできる相談ではない。国際観光の現場でつきつめて考えなければならない問題である。アジアのみならず、世界の各地に見られる状況だからだ。そ

のくらいの悩みは当然でしょう、できる限りの喜捨をすればよろしいと、宗教人なら言うのであろうか。



ポウパー山リゾートから眺めるタウンカラッ寺院

11. 民間伝承信仰のポウパー山とリゾート

バガンから南へ50キロ、およそ1時間半のところに標高1518メートルのポウパー山がある。この山の中腹にある50室のポウパー山リゾートは、何日かのんびり過ごすのに最適な滞在地である。バガンの猛暑もここにはない。プールがあり、ハイキングやホーストレッキングができる。夕日の眺めや、周辺の深い森からの鳥のさえずりもすばらしい。木造の部屋についでいるベランダからの眺望も、しっかりしたレストランも、快適な気候などと共に特筆に値する。ルームの料金は100～170ドルほどだから手ごろだ。バガンとポウパー山の1週間でそれぞれ2～3泊という、モノ・デステーション型の旅行もわるくないだろう。

このポウパー山のおもむきに、タウンカラッという名前のおもしろい寺がある。地上からほぼ垂直にもりあがった、ポウパー山の寄生火山のてっぺんに建てられている。標高差200メートルばかりの溶岩山の上まで、777段の階段を裸足になってのぼり、参拝する。この階段が寺院への参道であ

る。ふもとから参道の両側には門前のみやげもの屋さんが並んでいる。ここは仏教というより昔からの土地についている、ナツ神マハーギーリの神殿、いわば精霊信仰あるいは民間伝承というかたちの、神々が祭られている名所だ。世界各地の急峻な山頂や岸壁のてっぺんに、どうやって建てたのかと思われるような宗教史跡がたくさんあるが、ここもそうしたところのひとつである。リゾートから暇つぶしに出かけてみるのもわるくない。しかしむしろそこに足を運ぶより、離れたリゾートから彼方にそびえる神殿を眺めている方が美しいし、有難味がおおきいものと思われる。

バガンからボウパー山へ行く途中に立ち寄る農家で、砂糖ヤシの樹液を煮詰めてつくる素朴な飴をお土産にもらった。ビルマ語で「タニェツ」と呼ぶ。竹のヒゴで編んだ、かわいらしいカゴに入っている。こういう品物こそ、センチャット連中に扱ってもらいたいもののうちのひとつである。ちいさなハンモックのなかに埋もれた赤ん坊や、深いしわが顔中に刻み込まれた老人の笑顔が、けっこう忘れがたいバガン近郊の思い出である。



インディン村からのハイキングで訪れる
シュエインティン・パゴダ（インレー湖）

12. ビルマ第2の大都会マンダレー

マンダレーの人口は130万人。ミャンマーのほぼ中央に位置する、この国第2の大都会である。1885年にイギリスがマンダレーを占領するまで、この国最後の王朝がここにあった。現在王宮の敷地内には軍の兵士やその家族が住んでいる。第2次世界大戦中は日本軍が駐屯していた。王宮の敷地は3キロメートル四方という広大なものである。入り口に、「軍と国民は協力して連邦を阻害するものと闘おう」という大きな看板が掲げられていた。

あたらしいマンダレー国際空港は2003年に完成した。明るい大きな空港ビルだが、まだ利用客もまばらだし、運行している航空会社も少ない。中国の昆明からは定期便が入っている模様である。

マンダレー市内の観光としては純白の仏塔が1774本も整然と並ぶサンダムニ・パヤー、木造建築が美しいシュエナンドー僧院、マンダレー最大のマナムニ・パヤーなど、やはり多くの寺院が中心である。王宮のすぐ隣り、エーヤワディー川を見下ろす小高い丘（236m）マンダレーヒルは、全体が寺院になっていて終日多くの人々がつめかけている。とくに夕暮れ時はここからの夕焼け観賞をもくろむ観光客でごったがえす。

マンダレーからバガンへの船旅

マンダレーからバガンの間は250キロ、通常空路でつながるが、エーヤワディー川を舟で下る方法がある。ゆれない、のんびりできる、川風が涼しくて快適、陸上交通より気分的にラクである。等々、船で行く川旅のメリットは小さくない。マンダレー—バガン間は、一般乗り合いボートも、チャーター船もある。所要時間は6～7時間、料金はひとり40ドル前後だから手ごろだ。チャータ

一船は10人までの小型で460ドル、20人乗りが600ドル、30人乗りの中型が800ドルほど。とくにマングレーやバガン地方の暑い時期には、なるべく各地における水上交通手段を利用した観光方法を勧めておく。ファストからスローへとという旅行スタイルそのものが、高い満足度に直結するからでもある。

世界最大のパゴダになるはずだったミンゴン

マングレーに行ったら必ず足を伸ばすべきところが、ミンゴンである。人によってはマングレーそのものより、こちらの方を魅力に感じるかもしれない。マングレーからは10キロほどの距離だが、エーヤワディー川をゆったり船でさかのぼってゆく。周辺の風景もさることながら、頬をなでてくれる川風が何より心地よい。車で移動するより圧倒的に快適であることは、インドシナ各地の旅行に共通の魅力である。

ミンゴンに近づくにつれ、岸辺の向こうに巨大な建造物というか、一見茶色の小高い山が見えてくる。これがミンゴン・パヤーという、世界一の巨大な寺院になるはずだった建物の土台部分である。1819年に亡くなったコンバウン王朝のボードーパヤー王が建設に着手したものの、これが完成したら国を不幸がおそうという噂が流れ、王の死去とともに土台だけが完成した工事は放棄された。寺院への玄関として、エーヤワディーの川べりにつくられた2頭の巨大なライオン像もあったが、1839年の大地震により頭部が崩壊したまま放置されている。

この土台部分は一辺がおおよそ70メートルもの正方形。この上に、23×48×7センチという大きさのレンガをびっしり敷き詰め、75メートルの高さにまで積み上げてある。この土台の上に、さらに高さ80メートルもの仏塔を建てようとした。遠くから見ても近くによって見上げても、さらにこの土台の上まであがってみても、赤いレンガの巨大

な建造物の存在感たるや圧倒的である。

下から174段の階段をのぼる。地元の子供たちが待ち構えていて、手を引いてくれるであろう。巨大な土台にところどころ大きくひびが入ったり、崩れかけたりしている。大地震に耐えられなかった部分である。上まであがると、上部は雑草で覆われている。ここを大切な遺跡として、定期的に修理したり保全したりの活動が行われている形跡が見られない。国中にとほうもないスケールの遺跡群が残るミャンマーにとっては、この程度の（比較的新しく、しかも未完成である）遺跡では注意が行き届かないといったところなのであろうか。近くにはこの寺院に吊り下げられる予定でつくられたという、重さ90トン、外径5メートル、高さ5メートルあまりの釣鐘が保存されている。1839年の地震の際転げ落ち1896年まで土中に埋まったままだった。

ミンゴンからしばらく参道のような、街路樹におおわれ両側におみやげ屋さんが並ぶ通りを歩いてゆくと、とても美しい純白のシンピューメというパゴダに至る。



インレー湖で使われる漁具オクサウン

ミンゴンの船着場、といっても砂地の岸に船が着くと、しなる板を渡って浜へ下りるだけのところなのだが、そこには2頭仕立ての牛車が待ち受けている。これが地元のタクシーである。中年婦人たちのセールスがちらほら待ち受けていた。こ

ここでは皆が話し合っ、1週間に2日ずつ、交代でストリートセールスをする事になっている。そうでもしないと、結局みんながみんなの足を引っ張ってしまうからだ、ひとりの婦人が語ってくれた。彼女たちの平均売上げは月額2万~3万チャットだという。

それはさておき、マンダレーからゆうゆう日帰りで往復できるミンゲンへの舟旅は、マンダレー滞在中に絶対に欠かせない、満足度の高いエクスカージョンになっている。

街路樹がつくる緑のトンネル

マンダレーから北東におよそ60キロ。標高1100メートルの高原にイギリスがつくった避暑地がピンウーリンである。マンダレーからのドライブルートには、菩提樹、アカシア、楡、ネム、タマリンド、などのおおきく育った街路樹が道の両側から枝を伸ばし、緑のトンネルをつくっている。ミャンマーはどこへ行っても、町の中でも田舎の田園地帯でも、すばらしく立派な街路樹が生い茂っている。ついこの間まで車などなかった時代、歩く人にも牛車にも、街道ごとのこうした涼しい木陰が、人々の暮らしに不可欠なインフラだったものと思われる。

しかしピンウーリンまでの快適なドライブに比べ、ピンウーリン自体に多くの魅力があるわけではない。つまり涼しい気候がなによりというところである。広大な、美しく手入れされた植物園があったり、滝があったりするが、ここに時間をかけるくらいであれば、ミャンマーには時間を割きたいところがほかに多い。ホテルもとくにこれはというほど滞在してみたくなるところはない。

13. 多民族文化の宝庫インレー湖

ミャンマー東部の大きな一角を占めているシャ

ン州は、中国、ラオス、タイとの国境に接している。シャン族をはじめとする多くの少数民族が住み、総人口はおよそ55万人。豊かな農村部、山岳地帯のほか、歴史的な文化遺産も多い。なかでもこの国有数のユニークな風光で知られるのが、インレー湖とその周辺である。最寄りの大きな都会はマンダレーだが陸路では11時間ほどかかる。したがって一般的には、マンダレーからインレー湖近くのヘーホー空港まで、30分の空路でつなぐ。11月に眺めたシャン州の農村風景は、アカシアの花、ヒマワリやゴマ畑に広がる花の黄色がとても印象的だった。

インレー湖周辺の気候は、3・4月が概して暑く、7・8・9月は雨が多い。観光に好都合なのは乾季の10月~2月、とくに天候が安定する11・12月に観光客が多い。インレー湖の標高は1100メートルあるから、ヤンゴンやマンダレーなどより、気温は常時10度くらい低めである。このため11月~2月にここを訪れる場合には、セーターや厚い上着が必要である。朝晩の気温が10度を下回るときがあり、湖上をボートで移動する場合などはとくに寒い。



湖面に浮かぶように見えるインレー・リゾート
(インレー湖)

インレー湖は周囲の山々からの流れを集めた、比較的水深の浅い湖である。乾季には南北に細長い湖は15キロほど。雨季にはこれが22キロになる。

おなじく横幅は6キロが12キロまで広がる。昔から湖周辺の住民達は、多くをインレー湖に依存して暮らしてきた。笹舟という表現がぴったりの小舟（カヌーと呼んでいる）を、立ったり座ったりしながらたくみにあやつる。一本の長い櫂を小脇にはさみ、下のほうを足のかかとに引っ掛け器用に漕いで進む。空いた両手で漁具をあやつったりする。朝もやの湖面に浮き上がる薄墨のような漁師たちの姿は、詩的な美しさにみちている。水深は浅く、湖におおきな波が立つことはない。とくに朝晩のなめらかな水面は鏡のようになる。

朝焼けや夕焼けのころは、ときに息をのむ壮大なシーンが現れる。夕日が沈んだ後のひととき、山の端の金色が全天の真紅へと変わってゆく、空と雲のグラデーションに声もない。想像しうるすべての赤より、濃く、鮮やかに、明るく透き通っている。トウガラシ、りんご、完熟トマト、光にかざしたガラスのピノノワール、どう表現したところで実際の真紅には遠く及ばないのがもどかしい。

インレー湖の漁業と農業

湖の漁師たちが使うオクサウンという漁具。細い竹の棒と輪でつくった、高さ2～3メートルほどの円錐の内側に網がはってある。これをカヌーから湖底に押し込み、円錐の上から細長いヤスを突きこんで中の魚をとる。網の中にたまたま入った魚を、突いたり網にかけたりというのはなほだ悠長な漁のしかただ。ひぐらし水中を覗き込みながら、1日の水揚げは数尾、これで一家が食べられれば十分という暮らし方を、彼らは長く続けてきた。市場に数尾ずつの魚を出す1ヶ月の収入は、およそ2000～3000円だという。

水深は2～4メートル、雨季でも6メートルほどにしかならない。カモの群れやホテイアオイが浮かんで漂い、カモメ、ウヤシラサギ、ツバメが舞っている。とくに夕方、湖の周辺にはたくさん

の種類の鳥達が集まってくる。6月から8月の岸辺近くには、ハスや睡蓮がまどろむような美しい花をいっぱい咲かせる。

湖周辺の村々にはおよそ10万人が住んでいる。かれらの交通手段は主に笹の葉のようなカヌーだ。学校に通う子供たちもカヌーをすいすい漕いでゆく。湖独特の風物に、「浮かぶ畑」がある。竹を組んだ台の上に水草などを敷き詰め、その上に泥や土を盛って水上に畑の畝をつくる。畑が流れて行かないように、竹ざおを何本も上から差し込んで湖面に固定してある。ここでつくられたトマトや野菜、花々などがインレー湖の名産となって町で売られる。

湖の北にあるインタオチー村を、カヌーで訪問した。竹と木で組まれた杭上家屋が、網の目のような細く浅い水路の両側に立ち並んでいる。村人たちは、この水路で身体を洗い、洗濯もする。みんながこにこ手を振っている。子供たちの「タッター！」という呼び声がカヌーを追いかけてくる。「バイバイ」と言っているのだ。通常の湖の観光はエンジンつきロングボートが主役だが、村の細かな水路まで入るにはカヌーしかない。水深が20センチばかりのところがあるからだ。モーという名の水草をカヌーが山ほど積んでゆく。これが豚のエサになったり、畑の肥料になる。舟いっぱいモーが1300チャットだから、100円とす



カヌーで訪れるインタオチー村の杭上家屋群
(インレー湖)

こした。

インレー湖周辺の観光

上記のような湖の暮らしぶりや風光を見るだけで、インレー湖の印象が深く刻み込まれるであろう。あまりにわれわれの日常とかけはなれた文化が息づいているからである。湖上にコテージを持つホテルが数軒あり、中級から高級まで、13軒のホテルの部屋数はおよそ500。乾季のハイシーズンには8割までが埋まるが、年間平均の稼働率は5割程度のもようだ。目下日本からのツアーは、ここに1泊しかしないツアーが多い。しかしインレー湖の周辺にはさまざまな文化史跡もたくさんあるので、最低でも2・3泊はしたいところである。あるいはここに数泊する、モノ・デステーション型のツアーが考えられてもいい。

インレー湖の観光はあちこちにある手織物工場、紙工房、金銀細工の店、手巻きのタバコ屋、鍛冶屋、木工品工場、などを時間にあわせ、2～3日かけて回る。すべてが昔からの手作業だから、見ているだけで楽しい。ミンタウ村やインデイン村のマーケットも人気が高い。シャン州にはおよそ40種類の少数民族が住んでいるが、かれらがそれぞれの産品をかついでマーケットにやってくる。ほぼ物々交換に近いと思わせるほどの素朴な市場だが、その活気とに賑やかさに誰しもが引き込まれるだろう。

インデイン村から20分ほどのハイキングで、この国で一番古いとされるシュエインティン・パゴダを訪れることができる。紀元前3世紀ごろからとされるここには、なかば草木に埋もれかかった大小無数の仏塔（ストゥーパ）群がある。もちろん金色に輝く、真新しい仏塔もたくさん並んでいる。ふもとのインデイン村に、5日に一度たつ市場と組み合わせられれば最高だが、市場ぬきでも必見のところである。

水上寺院として知られるのがファウンドーウー

寺院。5体の小さな仏に参拝者が金箔を張ってゆく。長年それが続けられて仏は金のダンゴ状態になってきた。このほかにもいくつかの寺院がインレー湖にあり、いつも信者たちや観光客でにぎわっている。

湖の玄関はニャウンシュエという小さな町である。ここの市場も面白い。湖畔のホテルや観光には、ニャウンシュエからロングボートに乗ってゆく。ボートが発発してすぐ、水路の両側にひらける水郷のたたずまいから、先ずは感嘆詞が連続するであろう。

インレー湖の環境保全について

湖の入り口付近に「Let's keep Inlay free from plastic waste」という看板が掲げられていた。一見インレー湖の風景はクリーンで美しい。幻想的ですらある。しかし最近の急激な人口増、観光地化でゴミ問題が浮上しつつある。水上農家が使う農薬や化学肥料による水質汚染は、データが公表されないものの、住民たちはもう湖の水を飲まなくなつたという。じぶんたちの漁獲量も10年前に比べると半分を下回ると、オクサウンを水に沈めながら、ある漁師は語った。

インレー湖はミャンマーのというより、文字どおり世界の遺産というに十分な価値を持っている。この全体環境を持続的に保全するためには、世界からの観光客の協力が不可欠である。現在インレー湖観光に入る観光客はひとりあたり3ドルの入域料を支払っている。これを外国人観光客にはもっとおおきく、たとえば10ドルくらいにしていのではないか。周辺住民の環境教育から、ゴミや汚水の回収システムを完璧にするなど、なんらかの早急な手立てが必要である。水深は浅く、湖への生活依存度が高いわりにここの水量は少ない。文化遺産の観光経営以上に、インレー湖全体の持続的な観光地経営のデザイン構築が急務である。



朝もやの中で漁をする夫婦、足で櫂を漕いでいる
(インレー湖)

14. ビルマ人の聖地チャイティヨー

通称ゴールデンロック、チャイティヨー山頂にある寺院と、岩山の上に今にも転げ落ちそうなバランスで「置かれている」金色の大岩のことである。この大岩の上に、さらに高さ7メートルの仏塔が建てられている。ミャンマーの人々にとっての聖地であり、いつも多くの人々が巡礼に訪れている。

ヤンゴンから車で3時間、チャイティヨーのふもとにあるチャイトーの町まで、豊かで美しい田園地帯を走る。のどかに水牛が寝転んでいたり、田で働く農民の姿が見える。椰子の木やガジュマルの木陰に素朴な農家が散在し、水田風景に溶け込んでいる。のんびりした、平和そのものの光景を楽しむことができるドライブである。

チャイトーの町のケンボンスカンというバスターミナルから、チャイティヨー8合目にあるヤテタウンのターミナルまで45分、地元の様子合いトラックに乗り換えていかねばならない。来訪者のすべてが、ここでトラックに乗り換える。小型トラックの荷台に、ベンチ代わりの細い板が8本ほど渡してある。それぞれの板にぎっしり6人が座る。50人近くがすし詰め状態になったところで、

トラックは出発する。細く、曲がりくねった山道を、トラックはあえぎながら登ってゆく。ヤテタウンのターミナルというバス停まで、かなりスリルに満ちた、押しくら饅頭の小一時間である。つまり、急な山道を一般車両が勝手に行き来しないように、合理的な「パーク & ライド」のシステムを導入しているのである。したがってツアーの場合は、このトラックをチャーターできなければ、すし詰めトラックに相乗りしていく以外方法はない。

ヤテタウンから山頂まで45分ほど、ジグザクの坂道を歩いて上る。体力のない人は地元の人たちが担ぐ蓮台に乗って運び上げてもらう(10~15ドル、要交渉)。山頂に近くなると、道の両側におみやげ屋さんが並ぶ門前町となる。坂を上りきると比較的広い町があり、2~3星クラスホテルなどが数軒ある。霊山として、あるいは急な山の上によりあい平坦な町がある地理的条件は、ちょうど日本の高野山のミャンマー版と考えればいい。山頂から眺める四方の山々は、濃淡をなした稜線が幾重にもかさなってどこまでも広がっている。まるで日本の山々の風景そっくりである。

チャイティヨー寺院は早朝から夜遅くまで、参拝者の人波が途切れることがない。ひろい寺院の建物などが途切れた崖っぷちに、周囲24メートル、高さ8メートルもある、金色に輝く丸い岩が鎮座している。遠くから眺めても近くによって見上げても、どうして落ちてしまわないのか不思議なバランスである。ガイドの説明では、何人かで押せば揺らぐ、とまで言う。仏塔には仏陀の頭髪が「2本」祀られているらしい。文字通りのゴールデンロックは、まさに人々の信仰のマトとなるにふさわしい奇観だ。仏教遺跡関連に食傷気味の観光客も、これにはかなりたまげるといっていい。ロックは夜間もライトアップされて、カメラの絶好な被写体になっている。

ヤンゴンからは1泊2日の日程を組みたい。無

理矢理日帰りの強行軍がやっでできないことはないものの、道路事情なども併せて考えると、あまり無理な行程にするのは避けたほうが賢明である。往復のいずれかに、1200年以上の歴史を誇るシュエモードー大寺院がある、バゴの観光を組み合わせてもいい。



チャイティヨー山頂にある寺院と有名なゴールデンロック

15. ミャンマー旅行のモデル日程

日本の1.8倍という大きな国のミャンマーを、一度のツアーで売ってしまうのはいかにももったいない。せめて下記の1と2の2回に、あるいはもっと細分化して売ることが最初から意識しておくべきである。現在ヤンゴンまでの空路は通常タイのバンコクで乗り継がねばならず、日本からのパイプは太くない。それだけにいっそう、多種類のきめ細かなツアー造成が試みられなければならない。さらに現地における航空運賃を含めても地上経費はかなり割安感がある。単なる「東南アジア」としての安い、短い日程という思い込みは捨ててかかりたい。あるいはどうしても短い日程をとるのであれば、ヤンゴン、バガン、マンダレー、インレー湖などの1ヶ所だけという、ミャンマー内における「モノ・デスティネーション型」

を考えるべきだろう。何度も言うようだが、この国の観光的な魅力はそれほど大きい。

現行の航空便では初日のヤンゴン着が夜になるため、いずれにせよ一日目はヤンゴン泊を余儀なくされる。現在は最終日のヤンゴン発を夜にして、バンコク乗り継ぎ夜行便で日本に帰るのが一般的ななので、場合によっては全体のバランス上、最終日のヤンゴン宿泊を省くこともありえよう。

1) 中部ミャンマー7泊8日

ヤンゴン1泊、マンダレー2泊、(舟でバガンに移動)バガン3泊、ヤンゴン1泊

2) インレー湖とチャイティヨー6泊7日

ヤンゴン1泊、ピンダヤ1泊、インレー湖2泊、(ヤンゴン経由)チャイティヨー1泊、ヤンゴン1泊

3) インレー湖と周辺の6泊7日

ヤンゴン1泊、インレー湖4泊(カックーやカローへの日帰りを組み込む)、ヤンゴン1泊

4) バガンとポウパー山7泊8日

ヤンゴン1泊、ポウパー山2泊、バガン3泊、ヤンゴン1泊

5) 西部ミャンマー5泊6日

ヤンゴン1泊、ミャウ2泊、シットウェー1泊、ヤンゴン1泊

6) ミャンマー周遊11泊12日

ヤンゴン1泊、マンダレー2泊、(舟でバガンへ)バガン3泊、ピンダヤ1泊、インレー湖2泊、チャイティヨー1泊、ヤンゴン1泊。

*これは、どうしても1回の旅行でミャンマーをひとまわりしたい、という場合の参考としてあげておく。なお欧米からのミャンマー旅行は、一周だいたい12日から15日をかけている。



小舟を漕いで学校に通う子供たち（インレー湖）

むすびにかえて

はじめてミャンマーに行き、まず「へー」と感じるのは、女性や子供たちが顔にぬっている「タナッカー」という化粧についてだ。薄くといったうどん粉を、頬や額あるいは鼻に刷毛で刷いたような、といえばわかりやすい。これはどうやら、まず日焼け止め、あるいは美白剤であり、化粧水であり、白粉（おしろい）であるらしい。ミカン属の木の樹皮に水を加えながら、すりおろして顔にぬる。お母さんの背中に負われている幼い子供などには、顔中白い仮面のようにこれをぬられている子もいる。マーケットには必ず、タナッカーの数センチの太さの枝が、30センチぐらいに切りそろえられ、束ねて売られている。

十代の半ばにもなると、男の子はもうぬらなくなる。しかし女性の場合はそうとうな年配の人でもこれを欠かさない。男性側にたずねてみると、やっぱりタナッカーをぬっている女性が魅力的に見えるという。最近ようやく、ヤンゴンなどの都会では、若い女性たちの間にはタナッカーをしない人が現れてきた。ミャンマーでは男女ともに、ロンジーという巻きスカート風の衣装をほとんどの人々が着ている。もしかするとヤンゴンなど都会に住む女性たちは、ロンジーから洋服に着替え

るとき、同時にタナッカーをも洗い落としてしまうのかもしれない。

ヤンゴンのシュエダゴン・パヤーという金色の仏塔は、高さが100メートルもあり、さらにこの周辺を大小60にも及ぶ仏塔が取り囲んでいる。もちろんミャンマーの人々にとって最大の聖地だが、歴代の権力者たちはこぞってより大きな寺院やパゴダを作り続けてきた。これからもまたできるであろう。寺院の周辺に集まる極端に貧しい人々との対比が不思議である。ミャンマー全人口のおよそ1割が住むというヤンゴンは、かつて東南アジアきっての大都会とされていた。あるいは、350年にわたってアラカンの首都だったミャウは、シットウエーをその玄関として、ビルマに併合される1785年まで、独自にヨーロッパ、インド、アラビア方面との交易を行っていた。この国は知れば知るほど奥が深い。バガンから西へ10時間かけて車で行くと、世界遺産級植物・動物の宝庫ナマタウン国立公園がある。カックーの仏塔群はこんもりしたバンヤンツリーに囲まれて、2487本という途方もないスケールを誇っている。ミッチーナーから北のヒマラヤ地方は、ちょっとしたインフラの整備さえ行き届けば、トレッキング人気も沸騰するだろう。ミャンマー全体が、エコツーリズムにとって無限の魅力に満ちている。

世界のツーリズムにおいては、ミャンマーへの観光は「非人道的な軍事政権を助けるだけ」として、この国への旅行を手控える動きも見られていた。しかし、多くの観光客がもたらす経済効果は、実際は裾野広く、一般のミャンマー人の中に直に浸透してゆく。世界観光機関のいう「ツーリズムは平和へのパスポート」というとおり、もっとたくさんの方がこの国を訪れるべきであろう。アジア諸国きっての観光的な魅力に満ちている。航空便や各地のホテルなどインフラが整備されれば、日本からの観光客数が50万人あって少しもおかしくない。より多くの観光客が訪れることにより、

内向きなミャンマーの政治も少しずつ変わってゆく可能性がある。



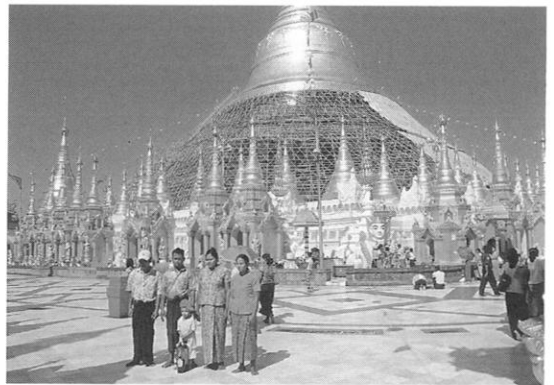
托鉢に出かける少年僧たち（チャイティヨー寺院）

ともあれこの国を旅行する場合は、「少人数でゆっくり」行きたい。スローであり、スモールであり、スマートにという3つのSである。何度もいうが、今までの「東南アジア」というくくりから切り離して捉えたい。そしてはじめからせめてひとりのお客様を、3回ぐらいはミャンマーにリピートさせるべき商品開発、あるいはマーケティングを考えるべきである。うまくやっていけば、ミャンマーファンやリピーターは必ずできるし、何より口コミを通じての人气に火がつくであろうことに間違いないものと思われる。09年の時点で日本からの観光客は、わずか1万4000人でしかないからだ。

食べものの魅力もまた大きい。自然そのままのたっぷりした野菜に、豚、鶏、牛などの肉類を合わせた料理はいずれも奥が深い。各種のスープややさしいカレー風味の料理もたくさんあるし、あるいは中華風の料理も魅力的だ。町やマーケットにおける屋台に挑戦する気があれば、1人前30円から50円という値段である。アジア的スローフードの典型が息づいている。もちろん豊富な果物類の魅力は言を俟たない。

日本からは教育目的の旅行先としても理想的である。「単一民族だ」などと、いわれない言説

が語られたりする日本だが、ミャンマーに出かけてひとまわりするだけで、目のくらむような多彩な民族と民俗に接することができる。歴史や文化についての比較によって、日本という国をよりよく知るためのきっかけを与えてもらうことができる。アジアそのものについての理解が、飛躍的に深化するに違いない。教育旅行、修学旅行先としてしっかり検討されるべき国のひとつである。長期滞在の地上費用も、圧倒的に安い。ツーリズムがどのように人々の役に立つか、はっきり理解されるであろう。そうした意味からも、ミャンマーからは学べるものがたくさんある。日本からのアウトバウンド不振が言われて久しいが、ミャンマーほど今後の高い可能性に期待できる国は少ない。



ヤンゴン最大のシュエダゴン寺院と大小の仏塔群

参考文献

- 綾部恒雄・石井米雄編（1994）『もっと知りたいミャンマー』弘文堂。
- 石井米雄・桜井由躬雄編、（2004）『東南アジア史Ⅰ』山川出版社。
- 大野徹（2002）『なぞの仏教王国バガン』NHKブックス。
- 京都大学東南アジア研究センター編（1997）『事典東南アジア』弘文堂。
- 日本政府観光局『国際観光白書2010』国際観光サービスセンター。
- 日本旅行業協会『数字が語る旅行業2010』日本旅行業協会。
- レイ・タン・コイ（2003）『東南アジア史』白水社。

（受付2010年10月9日 受理2010年11月16日）